ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　部屋に戻り、俺は二本の刀を壁に掛ける。

「そこにその二本が掛かっていると、何だか落ち着くね」

　俺の隣には樹葉がいて、そう呟いた。

「そうだな。定位置に収まった、そんな気がするよ」

　これでようやく、いつもの見慣れた風景に戻った、そんな実感がひしひしと湧いてきて、自然と口角が上がる。

「……ん？　どうした？」

　見ると、樹葉が俺を見てニヤニヤしていた。

「うん。ロランが嬉しそうで、私も嬉しい」

「…………」

　実に反応に困ることを言ってくれる。こんな時、どうすればいいんだっけ？

　俺は日ノ下から借りたラノベに、こんなシーンが無かったどうか思い出そうとするが、残念ながら該当するシーンは無い。

「……なあ。なんか近くないか？」

「そう？」

　ふと気が付くと、樹葉は俺の方にジリジリと近づいてきているような気がして、俺は思わずそう聞いたものの、ニコニコしている樹葉はそれを否定。

　なんだか笑顔が少し不気味に思えてきて、そして明らかに距離が近くなってきているのは間違いなくて、俺は思わず後ずさる。

　だが、その勢いで足がベッドの淵に引っかかり、俺は尻餅をついてしまう。

　そんな時だった。

「二人共ー、おやつの時間よー」

　レイの声が部屋の外から聞こえてきて、樹葉は何故かちょっと不満気に頬を膨らませ、俺は「助かった」と安堵した。

　最近、樹葉の様子が少しおかしいように思う。

　具体的には、俺が家出から戻ってきた後から、ちょっと距離が近くなっている気がするのだ。

　勿論、嫌ってわけではないし、寧ろ嬉しい位なのだが……本能的に危機を感じることもあり、さらには、どう対処して良いものなのか分からないので、正直困っていた。

　とは言え、こんなことを誰かに相談するわけにもいかず、俺が一人で考えながら、おやつをつまんでいた、そんな時だ。

「ねえ、あんたと樹葉ちゃん、何かあったん？」

　なんてことを、レイが聞いてきやがった。勿論小声ではあるが、詠は勿論、当事者である樹葉も近くにいるってのに……

顔がにやけているのが腹立つわぁ……

どうやら、そう聞いてくる割には、事情をある程度理解している様子のレイ。本来なら、俺はここで聞くべきなんだろうが……

「大したことじゃないよ」

「……へぇ。まあ、頑張って」

　俺がそう否定するが、レイの反応はこうだ。心なしか、微かに笑いを堪えているようにも見えるところを見るに、どうやらレイは、俺の心情まで察したようである。だが負けん。こうなりゃ意地だ。

　ごめんなさい、もう負けそうです。

　数日後、学校にて。俺は机に突っ伏しながら、心の中で敗北を認めていた。

　今も尚、背中に視線を感じる。ちらっと目を向けると、視線の先には、やはりというべきか、樹葉がいた。もうずっと、こんな調子だ。家でも学校でも、四六時中、樹葉の視線を体のどこかに当てられている感覚があり、ぶっちゃけて言えば、精神的に参っていた。しかも、何か話す度に、樹葉との距離が近いときたもんだ。

　いやー、ヤバいわ。あの娘ヤバい。

　これだけなら、別に俺が樹葉に「迷惑だ」ってはっきり言ってしまえばいいのかもしれんが……困ったことに、精神的に参っているはずなのに、それを「嬉しい」なんて感じている俺がいる。どＭか俺は……。樹葉、恐るべし。躾けられた犬や猫ってのは、きっとこんな気分なんだろう。

「おはよう、友絆……って、どうしたの？」

　聞こえてきたのは日ノ下の声。

　俺が返事をする代わりに、樹葉の方を指さしたら、「ああ、なるほどね」って納得したような様子を見せる。ちょっと驚いた。やっておいて何だが、これで通じるとは欠片も思っていなかったからだ。

「よく分かったな」

「まあ、前々からあんな風に、友絆のことを見ていたからね」

「え、嘘っ？」

　いやいや。それは無いだろう……。驚いた声を上げてそう思った俺だが、日ノ下は「気づいていなかったの？」と、逆に驚いた様子を見せた。

「クラスでも、二人の関係が噂になっていたんだけど、もしかして知らなかった？」

「知らん。なんでそんなことになってんだよ……」

　もしかして、前は他人にあまり興味を持っていなかったから、単純に視線や噂話に気がつかなかっただけ……なのだろうか？　いや、それにしたって、この学校に敵がいるかもしれないって思っていたんだから、いくらなんでも気が付くはずだろうに。

「一応、僕らの中では、二人は付き合っているってことになっているんだけど、違うの？」

「違うって！　俺は別にいつ……咲のことなんてなんとも――」

　つい『樹葉』って言おうとして、ここでは『咲』って名前で通っていることを思い出す俺。だが、

「ちょ、友絆！」

　日ノ下の声で、俺は自分が思いの外、大きな声で話をしていたことに気が付く。

　そして同時に、この教室に樹葉もいたことに。

　慌てて振り向く。

　そして、樹葉と数秒、目が合ったあと、

　樹葉は教室を静かに出て行った。

　俺のさっきのあの言葉は、つい反射的に出てしまったもの。

　落ち着いて考えてみると、今はもう、樹葉のことを「なんとも思っていない」ってことはありえない。でもちょっと前の俺はそうだった。

　正直、樹葉が、さっきの俺の言葉に、どう思ったのかは分からない。が、昔の俺がそんな風だったかってのを思うと、確信は持てなくとも、想像出来るまでに時間はかからなかった。

　クラス中の視線が、俺に集まっていくのを感じる。

　……やっちまった。

「友絆、行ってきなよ。先生には、僕の方から上手く伝えておくから」

「すまん、助かる」

　日ノ下にそう言われ、俺は教室を飛び出した。

　だが、もうそこに樹葉はいない。教室を覗いてみても、いなかった。樹葉のクラスメイトに話を聞いてみても、どうやらまだ戻ってきていないらしい。

　この学校は広い。それに、俺はまだ樹葉のことをよく知らない。

　彼女が今どこにいるのか、皆目検討もつかなかった。

　ホームルーム開始のチャイムが鳴る。

　日ノ下はああ言っていたが、流石に授業までには戻らないわけにもいかないだろう。

　時間はあと残り十分。

　少ない情報を必死に絞り出し、俺はあちこち探し回る。

　だが、結局樹葉は見つからなかった。

　最後にもう一度だけ樹葉の教室を覗いてみたら、今度はそこにいたものの、教室に入ろうとしたところで予鈴が鳴る。

「で、友絆……。結局、あれから何も話していないわけ？」

「『話して』じゃなくて『話せて』、な。咲、俺が近づくとすぐにどっか行くんだって……」

　まるで逃げられているようだよ。と、俺は吐き出すように日ノ下に愚痴る。

　今は放課後。どうやら樹葉はさっさと帰ってしまったようで、学校にはいなかった。

「どうするの？　このままってわけにはいかないでしょ？」

「まあ、なんとかする」

　俺は短くそう言うと、鞄を持って足早に教室を出る。幸い、一緒に暮らしているので、最悪夜には話せるとは思うが、出来れば早く仲直りしたかった。

　樹葉が不要な寄り道をするとは思えない。きっと、まっすぐマンションに向かっているだろう。

　と、思ったところで、ふと足が止まる。

　果たしてそうだろうか、と。

　わざわざ俺がいる場所に、戻ってくるなんてあるのだろうか。

　俺ならどうする？　いや……どうした？

　そこに気がついたら、これは……もしかして、俺が想像しているより、ずっと大変なことなんじゃないか、と思った。

　嫌な予感がして、マンションまで走って帰る。

　やはり、というべきか。

　樹葉はまだ、帰ってきていなかった。

「およ？　ロランじゃん。先に帰ってたんだねー」

　どうやら先に帰ってきていたらしく、リビングからはレイの声がする。

「あ、レイ……！　樹葉は帰ってきたかっ？」

「いや、まだだけど……どったの？」

「すまん。ちょっと出てくる……！」

　俺はそう言うと、荷物を放って出て行った。

　出てから、はっとする。だが、俺は止まらない。

　行くあてが無かったのだ。樹葉がどこにいったのかなんて、検討もつかない。

　足を止めることは無いままでも、思考を止めることはしないまでも、俺は、彼女のことを何も知らない自分に愕然としていた。

　唯一思いついたのは、商店街。あそこは、樹葉がよく買い物に利用していたはず。

　だが、いくら探しても、樹葉の姿はどこにも無かった。

「考えろ……考えろ……」

　俺は、必死で脳を回転させる。

「あと樹葉が行きそうな場所は……何か、ヒントは無かったか？」

　自分を落ち着かせるように、わざと心の中で考えたことを自分に聞かせる。

　樹葉とまともに会話をするようになったのは最近だ。正直、たいしたことは何も――

「あっ！」

　思わず上げた声に、近くにいた人達が振り向く。慌てて「すみません！」と謝って、俺は今思いついた場所に向かって走り出した。

俺が向かったのは、『大河内小学校』。俺や樹葉、さらにレイや詠、そして『ワルキューレ』のほぼ全員がかつて通っていた、あるいは現在進行形で通っている小学校だ。

　今は放課後。日もそろそろ落ちかけてきた頃だから、残っているのは先生くらいなものだろう。

少し前、俺が『ＰＴＳＤ』で倒れた時に、樹葉が俺にここでのことを話してくれたことを思い出したのだ。

　ここは、あいつにとってはあまりいい思い出が無いところだ。だけど同時に……もしかしたら、樹葉の中では、とても大切になっているのかもしれない記憶を呼び起こされるところでもある。

「…………」

だから、ここに樹葉がいたことに、俺はさして驚くこともなかった。

「……探したぞ、樹葉」

　俺は、グラウンドの椅子に座りながら校舎を眺めている樹葉に、そう声をかけた。

俺の言葉に特に反応する様子は無い。無視されている感じではないのだが、どうしていいか分からない俺は、一声かけてから樹葉の隣に座った。

　拒絶されなかったことに安堵しつつ、俺は樹葉に話しかける。

「あー……にゃ、何してんだよ。こんなところで」

　ここで噛む俺。俺の対人スキルなどこんなものである。大体、一目見れば校舎を眺めているのなんてわかりきっているはずなのに、「なにしてんだよ」って聞くのは如何なものか……。

　俺の質問に、樹葉は何も答えなかった。というか、こっちを見てくれない。

　やはり切り出し方を失敗したか……と、内心で頭を抱えながら、次はどう声をかけようかと悩んでいると、あっという間に日が落ちてしまった。

「なあ、樹葉。もう――」

「ロランは、どうして私のことを探しに来たの？」

　もう遅いし、帰ろうぜ、と言おうとした時、ようやく樹葉が話しかけてきてくれた。

「えーっとだな……」

　そこで、俺は言葉に詰まる。よく考えてみれば、俺はなんでこんなに必死で樹葉のことを探していたのか、分からなかった。朝の件に関して謝りたい、ってのはあるのだが……本当の気持ちは、それじゃない気がする。

「……なんでだろ？」

「……むぅ」

　俺たちの間の空気が、一気にいたたまれないものになる。いや、元々微妙な空気ではあったのだが。

「ちょ、ちょっと待って」

　可愛く口を尖らす樹葉を可愛いと呑気なことを感じながらも、俺は自分の中で、自分なりの答えを探そうと努力すること数秒……さっぱり見つからないことに冷や汗をかいた。ちょっとだけ、樹葉からオーラが湧き出ているような何かが見える気がする。

　これはあれだ。最近、樹葉から感じるようになった、あの「何か上手いことを言わないと、許されない」っていう感じのやつだ。

　とはいえ、まあ。ちゃんと謝らなければならない事があるのはたしかなわけで。

「その、朝は悪かったよ。あんなことを言うつもりじゃなかったんだ」

　日ノ下の言葉を否定するなら、もっと適切な表現があったと、今では思う。少なくとも、『俺』が言っていい言葉じゃなかった。

「なんか、クラスじゃ『俺と樹葉が付き合っている』ってことになっているって日ノ下に言われて、ただ『そうじゃない』ってことを言いたかっただけなんだ。その……『なんとも思ってない』なんて言って、ごめん」

「……なんとも思ってないわけじゃ、ないの？」

　樹葉の問いに、俺は頷く。俺が家出から戻ってきたあの日から、俺は皆のことを、ちゃんと見ようって思った。「なんとも思ってない」なんて、そんなはずが無い。

「じゃ、じゃあ、さ」

　すると、樹葉はどこか緊張したように、

「私のこと、どう思ってるの？」

　そう、聞いてきた。

　その後のことは、あまりよく覚えていない。

　樹葉の質問に、ちゃんと答えたわけでは、なかったと思う。

　でも、二人で一緒に帰った。帰ったら、レイと詠が心配してたけど、樹葉が適当に誤魔化してくれた。俺としては、今回の件はこの二人にも叱られてもいいかなって思ったんだが……樹葉の中で、一応は折り合いをつけたっぽくて、大事にする気はないようだ。

　その後は、普通に風呂に入って、遅めの夕食をとって、気づけばもう寝る時間。

「…………」

　俺は、一体何をやっているのだろう。

　自分の部屋で、俺はようやく、そう思うことが出来た。

　だが、それも一瞬だけ。

「ロラーン。入っていい？」

　コンコンというノックの後、レイの声が聞こえてきたからだ。適当に返事をして戸を開けると、レイの後ろから詠も入ってくる。

「そ・れ・で」

「樹葉と、何かあったんですか？」

「よく見てるな、お前ら……」

　まあ、わざわざ俺の部屋に来た時点で、なんとなく予想はしてたんだが……

「樹葉ちゃんも寝ちゃったし、話を聞かせてもらいましょうか？」

　レイは笑顔でそう言うが、その裏には「今日は逃がさないよ」と言われている気がした。さりげなく、詠も部屋の戸の前に座っている。

　まあ、こうなった以上、俺もこの二人には後で話しておこうと思ったので、誤魔化すつもりはない。

　一度話し始めたら、二人共、話の途中で口を挟むことはしなかった。そっちの方がありがたい。

「……というわけなんだけど、俺ってどうしたらいいと思う？」

　全部話し終わると、二人は特に何か言うわけでもなく、また、俺もどう振る舞えばいいのか分からなくて、しばらく無音が辺りを包んでいた。

「あー……」

　どれくらい経っただろうか。最初に沈黙を破ったのはレイだ。

「これってさ。私らは口出しちゃダメなやつかな？」

「……え？」

「えーっと、そうかも、しれません……ね？」

　レイの言葉に、詠も続く。あれ？

「あー……二人共、なんかアドバイス的なものは？」

「ま、頑張りなさい」

「てきとうっ？」

「頑張って下さい」

「詠までっ？」

　別に二人に任せっきりにするつもりは無かったが、それでも何かしら樹葉との間の空気を上手いこと元に戻せるアイディアが出てくれるかと期待していた俺は、思わず悲惨な声が出た。

　てか、なんで「口出しちゃダメ」なのだろう。

「じゃ、そういうわけで～」

「お邪魔しました」

「ちょ、ま――」

　止めようとする俺の言葉が全部言い終わらない内に、二人は部屋を出て行ってしまった。一体二人は何をしに来たんだ、と思わず愚痴をこぼしそうになるが、それはグッとこらえる俺。

「あのさ、ロラン」

　取り敢えずベッドに腰掛けて、これからどうしようかと思っていたら、再びレイが顔を覗かせてきた。

「ロランはさ、『なんとも思ってない』って言っちゃった事については謝ったんでしょ？」

「え？　まあ……そうだな」

「じゃあさ、もういいじゃん。その後の『それ』に関してはさ、後は時間が解決してくれるんじゃない？　私が見たところ、二人が険悪なムードになってるわけじゃないんだし」

　そう言われると、なんだかそんな気もするのだが……

　なんというか、それは嫌なんだよな。

「それでも、ロランが『早く元に戻したい』って思ってるってことはさ、それだけの理由が、ロランの中にあるんじゃない？」

　そう言うと、レイは今度こそ、姿を消した。

　後に残ったのは、俺だけ。

　俺は、レイに言われたことについて一人、考えていた。

　数十分後。俺は自分の部屋を出て、隣の樹葉の部屋の戸の前に立っていた。

　実は、立つこと既に五分。ノックするのに、俺はそれだけの時間を要していた。

　流石にもう夜も遅い。いつもなら、きっと樹葉は寝ている時間のはずだ。だが、不思議なことに、戸の隙間から漏れる光を見るに、まだ樹葉は起きているらしい。

　タイミングがいいんだか、悪いんだか……。

　やっぱり明日にしようかなー……と考えてしまっている自分も確かにいるが、それは何とか抑え込めていると思う。とは言え、いざとなると、緊張するのも致し方の無いことだろう。

　呼吸を、一つ、二つ……さっきから同じことをやっているのだが、流石に何度もやっていれば、だんだんと慣れていくものだ。

　気合を入れて、俺は戸を静かに叩いた。

静か過ぎたのか、中から返事は無い。もう一度、今度はさっきよりも強めに――

「……っ！」

　強く叩きすぎて、俺の方が驚く始末である。だが、驚いた甲斐あって（？）中からは「はい」という、確かに樹葉の返事が聞こえてきた。

「入るぞ」

「え、ちょ……ロランっ？」

　俺は戸を開ける。開けた瞬間、馬鹿をやらかしたことに気がついた。ノックした時に、なんで「俺だ。今いいか？」程度でも、簡単な声掛けをしなかったのか……。

　まさか、樹葉が裸でそこに立っているとは夢にも思わなかった。

　戦闘の経験がそこそこあるわりには、華奢で白くて透き通るような……いや、何冷静に観察してんだ俺は……！

「わ……悪いっ！」

　慌てて戸を閉める。閉めた戸に寄りかかるようにして、俺はズルズルと床に座り込んだ。思わず両手で顔を覆う。

　やっちまったぁ……！　これ、どうすりゃいいのっ？

　持っていたパジャマが絶妙にアウトなところを隠してくれてはいたが、問題はそこじゃ無い。

「え、えっと……い、いいよ？」

　着替え終わったのか、樹葉の声が聞こえる。だが、俺はそこから動けなかった。

　ヤバい。顔と手が熱い。どんな顔してんのか分からんけど、樹葉には絶対見せられない……！

「ロ、ロラン？」

　中々入ってこない俺を心配したのか……俺に裸を見られて、流石に焦ったような、恥じらいを含んだ声で、そう声をかけてくれる。

　そういう態度で接してくれた以上、中に入らないという選択肢は選べなかった。

　とは言え、覚悟があるかと聞かれれば、それはまた別の話。

「ちょ、ちょっと待って下さい……」

　我ながら、ひどく情けない声で、俺はそう呟いた。

「ほんと、マジすみませんでした」

　入るや否や、俺は勢いよく頭を下げる。ラッキースケベは日ノ下から借りていたラノベの中にもそんなシーンはあった。だが、罪悪感は想像以上で、興奮はしているんだろうけど、決して明るい気持ちにはなれない。

「う、うん。私もちょっと不注意だった……から。こんな時間に来るのは、レイちゃんくらいかなって……」

　樹葉の声が、頭上から聞こえる。顔をまともに見れなくて、俺はこの後、どうすればいいか分からなかった。

「あ、頭上げて、ロラン……」

　だがそんな俺の態度は、樹葉にとってはあまり居心地のいいものでは無かったようで、困ったような、でもちょっと怒った感じを内に秘めた声で、そう告げる。

　顔を上げたら、樹葉の顔は、結構赤くなっていて、やっぱり恥ずかしかったんだ、と、そう思った。

「い、樹葉って、寝る時は裸なんだな……」

「う、うん。そっちの方が寝苦しくなくて……」

　なんだこの会話は。おい、俺。フォローするにしても、もっとあっただろうが。

　さっきよりも心なしか、顔の赤みが増したような気がするのは、きっと気のせいじゃ無い。

「すまん」

「そ、そう言えばロランは、どうしたの？　いつもなら、もう寝てる時間だよね？」

「まあ、そうなんだけどさ」

　時計を見れば、確かにもう十時半を回っており、明日の朝練を考えれば、そろそろ寝たほうがいい時間ではある。それに、さっきのアレのせいで、気概を削がれたから、もう帰りたいってのもあるだろう。

　だからこそ、ここで逃げたら駄目なんだろうな。そう思った。

　少しだけ、樹葉の部屋の様子に意識を向ける。最後に彼女の部屋に入ったのは、いつだったか。そんなことを、ちょっと思った。

　ベッドや机の位置は、俺とほとんど同じだ。ただ、やっぱり女の子っぽいというか、学生っぽいというべきか、淡い緑を基調とした家具がいくつか並んでいる。絨毯とか、客人をもてなす用の小さなテーブルなんかは、俺の部屋には無いものだ。

「ちょっと、樹葉に伝えたいことがあって。今、いいか？」

「……うん。いいよ」

　きっと樹葉も眠いだろうに。それでも俺に付き合ってくれることに感謝しながら、俺は樹葉に勧められるがままに、テーブル挟んで、向かい合うようにしてクッションに座る。

「珍しい？」

　俺が話すより先に、樹葉がそう聞いてくる。

「まあ、な」

「ふふっ……ロランの部屋って、必要最小限の物しかないもんね」

「ベッド、机、ハンガーラック。後は刀が二本。それと日ノ下から借りた本。これだけだからな」

　指を折りながらそう言ってみると、本当に俺の部屋って物が無いよな……って思う。

「本棚とか、キャビネットとか、今度買いに行く？」

「そうだな。みんなで出かけた時にでも、ついでに見ていくか……って、そろそろ本題に入りたいんだけど、」

「あ、ごめん。中断させるようなこと聞いちゃって……」

　いや、ちょっと緊張は解れた、と思う。多分、樹葉は俺のそんな気持ちに気づいて、フォローしてくれたのだろう。

「寧ろ助かったよ。でさ、」

　だから、多分。

　俺は、レイの言葉に対する答えを、もう一度頭に思い浮かべて、

「俺、樹葉のこと、好きだよ」

　ちゃんと、それを言葉に出した。

　時が、ちょっと止まる。そんな気がする。

　言えた、と思う。我ながら、割とあっさり言えた、そんな気がする。

　樹葉は最初、俺の言ったことを、ちゃんと認識出来なかったのだろう。少し首を傾げて、顔に「？」を浮かべていた。で、俺の言葉を理解したのか、さっきまでとは比べ物にならない位、みるみる内に顔を赤く染め上げた。

　いや、ほんと。樹葉には申し訳ないけど、録画して何度も見たいレベルだ。青い苺が赤くなるのを、早送りで見ているみたいだった。終いには、さっきの俺みたいに、両手で顔を覆う始末。

　そんな反応をされると、こっちも照れるんだが……きっと、さっきとは比べ物にならないくらい、俺の顔も赤くなってると思う。

「悪い……。いきなりこんなことを言われて、樹葉も困ってると思う」

　俺がそう言うと、樹葉は顔を手で隠したまま、コクンと頷いた。

「だって、さっきのアレの流れから、そんなこと言われると思わなかったから……」

「それについては、本当に申し訳ない」

　俺だって、まさか樹葉が裸でいるなんて思ってなかった。

「樹葉に『私のこと、どう思ってるの？』って言われてさ。俺なりに、真面目に考えてみた」

　まあ、気が付けたのは、レイの一言があったからなんだけど。

　落ち着いて考えてみると、俺のレイや詠に対しての気持ちと、樹葉に対しての気持ちは、少しだけ違う。ここに来てから、樹葉は朝はほぼ毎日俺のことを起こしに来てくれていたし、それ以外でも、たまに俺の部屋に来たりすることもあった。前に倒れた時だって、レイと詠も勿論心配してくれていたんだろうけど、樹葉は俺のベッドの傍からあまり離れたがらなかったし、たまたまだろうけど、悩み事を最初に聞いてくれるのも樹葉だ。闘悟のことだって、吹っ切れたのは樹葉のお陰だし。

　そんなんだから、一番触れ合っていたから、きっと俺も、樹葉のことは他の二人とは違う意味で『好き』って思ったんだろう。

　だから、樹葉の視線をしょっちゅう感じていた時だって、嫌な気持ちにはならなかったし、「なんとも思っていない」なんて言って樹葉がいなくなった時だって、俺は自分の想像以上に焦っていた。

　恋心って、こういうものなのかもしれない。

「本気で、一人で向き合って、俺って樹葉のことが好きなんだって思ったし、上手く言えないんだけど……これからも一緒にいたいし、一緒に戦いたい。勿論この中にはレイや詠も入っているけど、樹葉とは特に、そういう仲でいたいって思ってる。

　別に、付き合いたいから、返事が早く欲しいとか、そんなことを言っているわけじゃないんだけど……樹葉には、ちゃんと伝えたかった」

「ロラン……」

「あの時、ちゃんと答えなくてごめん」

　俺はそう言って、頭を下げた。

　チュンチュンという鳥の鳴き声で、目覚ましより少し早く起きた俺。余程眠りが浅かったのだろう。

　淡い期待を込めて、俺は周りを見渡して、溜息を吐く。ここは、俺の部屋では無かった。

　うん。まあ、そうだよな。帰った記憶が無いもん。

　さっきよりもさらに淡い期待を込めて、俺は目を閉じて隣に顔を向ける。零点何パーセントの確率だけど、俺は最後まで諦めない。いや、まあ、温度や重さ的に気がついてはいるんだけど、それでも確認せずにはいられなかった。

　恐る恐る目を開けて……樹葉の姿を確認し、もう一度目を閉じた。

「やっぱいるよな……」

　スースーと寝息をたてる樹葉に、分かっていても体は軽く硬直してしまう。怖くてもう、目を開けられない。

　どうしてこうなった……？

　目を閉じたまま、昨日のことを思い出していく。

　まあ、確かに告白はした。思い出しても顔が熱くなるのが分かるけど、事実だから受け止められる。

　が、しかし。俺は確か、こうも言ったはずだ。「返事が欲しいとか、そういうわけじゃない」って。俺としては、樹葉が好きだって思ってるってことを、本人に知ってもらえればそれで良かっただけなんだが……。

　その時、目覚ましが鳴って、樹葉の体がピクンと動いた。

「んぅ……あ、おはよう。ロラン」

　おお、すげぇ。すぐに起きた。俺はあまり寝起きが良くない方だから、こんなにすぐには覚醒しないんだが……樹葉は、そうでもないっぽい。

　欠伸を噛み殺しながらも、少し伸びをして体を左右に傾けるだけで、樹葉は完全に覚醒したようだ。

　今は五時半。朝食の当番は樹葉なので、彼女がこんなに早く起きたのはそのためだ。

　俺も、樹葉が当番の時は、早く起きることにした。彼女に、料理を教えてもらうために。

　部屋を出る際、俺は念のためドアの隙間からこっそり辺りを伺い、誰もいないことを確認してからで出る。万が一、詠やレイに知られたら、何と弁明していいか分からない。

「あれ？　どうしたの、ロラン？」

　樹葉はそんなことは全く気にしていない様子だったが。出来ればもう少し気にして欲しい。

　そんな俺の心情など、彼女は知るよしもないので、可愛く小首を傾げる樹葉は、壁から自身のエプロンをとって着け、俺のエプロンをとって渡す……かと思いきや。

「……いや、自分で着れるから」

「えー」

「えー、じゃないです」

　まさかエプロンを樹葉に着せてもらいそうになるとは思いもせず、心の中では若干慌てつつも、俺は彼女の手からエプロンをひったくる。

「で、今日は何を作るんだ？」

「んー、普通にスクランブルエッグと、ソーセージと、サラダでいいかな？」

「それ、俺必要なくね？」

　ついでに、こんなに早く起きる必要も無かったと思う。

　手際よく準備をしている樹葉の邪魔をする暇もなく、

　結局、俺は樹葉の朝食作りを、ただ見ているだけで終わってしまった。